HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	津和野（島根県）からやってきて札幌を築いた先人とされる人たち ： 高岡直吉・熊雄兄弟のこと
著者	黒田，重雄; KURODA，Shigeo
引用	開発論集(98)：161-177
発行日	2016-09-30

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

開発論集　第98号　161-177(2016年９月)

津和野（島根県）からやってきて札幌を築いた先人とされる人たち
―― 高岡直吉・熊雄兄弟のこと ――

黒　田　重　雄*

目　次

はじめに
１．山岡氏の郷土史には何が書かれていたのか
２．津和野とはどういうところか
３．高岡直吉・熊雄の略歴
４．津和野と北海道とのかかわり
５．島根県と北海道・札幌とのかかわり
おわりに
〈補説〉：マーケティング研究における西 周と森 鴎外について
注と参考文献

はじめに

2014年に島根県の津和野町を訪れた。筆者は，若かりし頃，観光で津和野を訪れており，その風景や感慨が忘れられず，今一度見てみたいとたいと，40数年振りに彼の地を訪れたのである。急ぎ足ではあったが，森鴎外記念館や立派な安野光雅美術館（プラネタリューム付きであった）が新しく作られていたことが目立つ程度で，ほとんど変わらない風景であったので，やはり来てよかったと思わせるものがあった。

ただ，道路わきの側溝には大きな錦鯉が数多く泳いでいるが，かつて来た時には，静謐な川に色とりどりの鯉が映えたが，洪水災害のためとか川がやや濁っていたのは残念ではあった。

有名な観光ルートをひとめぐりした後，ホテルに帰って部屋に備え付けの本を手にした。郷土史家の書いたこの地の歴史本であった(1)。

１．山岡氏の郷土史には何が書かれていたのか

この本の帯には，「津和野の偉人一堂に　郷土史研究家・山岡さん自費出版」とある。

新聞『山陰中央新報』（2014年９月24日）の紹介欄では，

*（くろだ　しげお）北海学園大学開発研究所特別研究員（元北海学園大学教授，北海道大学名誉教授）

島根県津和野町町田在住の郷土史研究家山岡浩二さん（58）が，地元の偉人の業績を紹介し，山陰中央新報や郷土誌などに掲載された寄稿文をまとめた著書「津和野をつづる」を自費出版した。文豪・森 鴎外（1862〜1922 年）をはじめ，江戸後期から幕末，現代にかけて活躍した 18 人の評伝を一堂に集め，優れた人材を輩出した郷土の誇りを伝えている。

また，「発刊に寄せて」として，岩町　功氏が，一文を寄せていた。

山岡さんの論考・評伝には，「沖本史学」とも称すべき理念が貫徹しています。その一つは，徹底した資料・史料の探査，二つは，特殊から普遍を帰納する科学的史観，三つは，対象への清新な，しかも限りない愛情です。

この本をぱらぱらめくっているうちに，文豪の森 鴎外，哲学者の西 周などとともに「高岡兄弟」のことが載っていた。それを何気なく読んでいるうちに驚いた。二人とも札幌農学校の出身であり，ひとりは初代の札幌市長，もう一人は第三代北大総長になった人たちである，とあったからである。

そういえばと開いたこの街の地図には，高岡直吉・熊雄兄弟の活躍を讃える「高岡通り」という通り名もあったことを思い出す。彼らの足跡には札幌の地が大いに関係していたということである。

帰札後，確かに，札幌歴史資料館の「札幌の歴史を築いた先人達」として名前の挙がっている 46 名中の二人（兄弟）であることも確認した[(2)]。

筆者は，高岡兄弟についての自己の無知を羞じるとともに，この本の中で，山岡氏が，「札幌を訪れたとき，札幌時計台にある図書には，高岡兄弟のことは単に島根県出身とあり，津和野出身とは書いてなかったので残念であった」と書いていたこともあり，もう少し調べて発表して見たいと思うようになった。これが本拙稿を書くきっかけになっている。

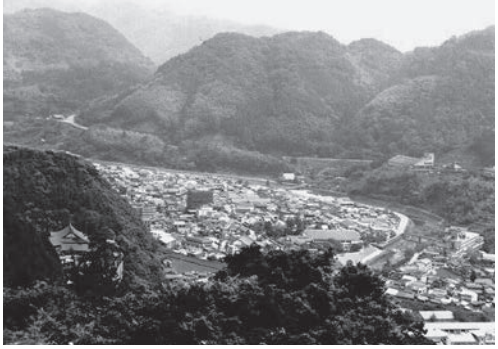
また，筆者は，経営学（マーケティング）を研究しているが，その折，津和野出身の学徒たちからも多大の恩恵を被っていることが分かり，その点についても付け加えておきたい。

２．津和野とはどういうところか

まず，津和野町というところは，どういうところなのかである。

札幌から津和野までの距離は，陸路で約 1800 キロというところである。現在の津和野町の面積は，札幌市の 4 分の 1 程度であるが，山が多く，作物を作るには狭いところという印象である。現在，人口約 8 千人弱，方 4 km で，外様大名亀井氏の津和野城（址）のある城下町といった風情である。

☆: 札幌、　　✸ ：津和野（島根県）



津和野町の眺望

津和野城下町周辺の空中写真。1976 年撮影の 2 枚を合成作成。
国土交通省　国土画像情報（カラー空中写真）を基に作成。

細長く狭い山間の町であるが，かつての津和野藩の藩邸・藩校の跡も残り，道の側溝には鯉も泳でいる，別名小京都といわれるに相応しい静かな伝統ある佇まいで，癒しを求める旅行者にはたまらない魅力を備えた地域なのである。

JR 津和野駅（筆者撮影）

通りの雰囲気

また，森 鴎外の旧宅と記念館（平成 7 年（1995） 3 月竣工），西 周の旧宅，津和野藩の「養老館」，津和野葛飾北斎美術館，稲荷神社，安野光雅美術館（プラネタリューム付属）（平成 13 年（2001） 3 月竣工）といった施設がある。

森 鴎外の旧宅（津和野町ホームページより）

西 周の生家（筆者撮影）

観光紙には，毎年 7 月末に行われる祇園祭の中で，街中を練り歩く鷺舞は津和野の代名詞であり，国の重要無形民俗文化財に指定されている，とある。

一方では，この地域から有名人を数多く輩出している。作家の森 鴎外，哲学者の西 周，天文学の堀田仁助，最近では，画家の安野光雅，そして，ここで紹介する高岡直吉・熊雄兄弟などである。

３．高岡直吉・熊雄の略歴

３－１．高岡直吉（札幌市初代市長）(3)

高岡直吉（たかおか　ただよし）は，1860 年（安政 7 年）1 月 22 日津和野藩士･高岡道敬の嫡男として島根県鹿足郡津和野町（現在の島根県津和野町後田）に生まれる（1860 年 1 月 23 日より万延元年となる）。

藩校養老館で学び，後に浜田県立英学所で学んだのち，1875 年上京，東京英語学校入学。1878 年（明治 11 年）に札幌農学校へ官費生として入学。（ここで，なぜ，札幌農学校だったか，については，山岡は，家が貧しかったため，無料の農学校へいったのではないか，としている）。1887 年（明治 20 年）農学部進学。新渡戸稲造から強い影響を受けている。

同校を卒業後官吏となり，1908 年宮崎県知事，1911 年島根県知事となる。彼は初の島根県出身の島根県知事である。製紙や陶器，八雲塗などの産業振興に貢献した。その後鹿児島に渡り鹿児島県知事になり，桜島噴火災害に奮闘した。そして門司市長となる。

札幌市会が直吉の門司市長職の満期を待って札幌市長就任の要請をし，1923 年，初代札幌市長となる。

札幌では電車事業の市営化の為，助川貞二郎との交渉に尽力し，1926 年にその努力を実らせる。札幌市の下水道整備等，ライフラインの整備の基盤を作り上げた功労者として今尚札幌ではこの功績を称えられている。

1942 年 9 月 1 日，東京で逝去。享年 83 歳。墓碑には「従三位勲二等　高岡直吉之命」と刻まれている。

３－２．高岡熊雄（第三代北海道帝国大学総長）(4)

高岡熊雄（たかおか　くまお）は，津和野藩士高岡道敬の次男に生まれ（長兄は高岡直吉），旧制山口中学校に進学，ここで出会った国木田哲夫（独歩）とは終生の親交を結んだ。その後中途退学して札幌農学校予科に進学。農学校では，新渡戸稲造に師事。

札幌農学校卒業後，同校助教授となり新渡戸の後任として農政学植民学を担当した高岡は，農政学・農業経済学研究のためドイツに留学し，帰国後教授に昇任した。同校の大学昇格，すなわち東北帝国大学農科大学⇨北海道帝国大学農科大学（のち農学部）への改編にともなって各大学の教授となり，また法学博士・農学博士の学位を受けた。

1933 年には北大の第 3 代総長に就任，同大「北方文化研究室」（学内措置で 1937 年設置）・「低温科学研究所」（1941 年官制公布）の新設などに尽力した。

1923年，兄の直吉が初代の札幌市長に選ばれ5年にわたる任期中，同市の本格的な都市開発に着手すると，学者として札幌商業会議所と密接な関係を結び，市参与・市会議員として札幌市政のさまざまな分野に関与した。第二次世界大戦後には北海道総合開発委員会の委員長を務め「札幌名誉市民」の称号を受けている。1961年（昭和36年）12月29日逝去。享年91歳。

なお，熊雄は，札幌農学校時代師事した新渡戸稲造の追憶文を書いている[5]。

4．津和野と北海道とのかかわり

筆者は，独立行政法人北方領土問題対策協会の「あなたの町と北方領土とのかかわり　島根県」によって，実は，津和野と北海道との関わりはこれまでも浅からぬものがあったということが分かってきている[6]。

「あなたの町と北方領土とのかかわり　島根県」には以下のように書かれている。

> 青函トンネルの開通をみた今日とは違い，冬の津軽海峡は波も荒く交通が不便な時代の北海道は，島根県から地理的にも離れた，遠い島のように思われていました。
>
> ところが，この島根県にも早くから北海道の測量や開発に，めざましい活躍をした人たちがあるのです。
>
> 古くは江戸時代に，江戸と北海道間の航路の測量にあたった〈堀田仁助〉や，幕末になって北海道の開発と警備の重要さを将軍に申し出た〈西　周〉などがそうです。
>
> 明治時代になってからも，津和野藩からはるばる札幌農学校へ入学し，卒業後，北海道の支庁長・参事官を務め，宮崎県知事・島根県知事を歴任後，初代の札幌市長に招かれ敏腕を振るった〈高岡直吉〉と，その弟で，同じく札幌農学校卒業後，北海道大学の先生となり，後に同大学の総長になった〈高岡熊雄〉は，学者の立場から北海道の農業開発に大きな功績を残しました。
>
> このように江戸時代から，北海道の開発に関係した人たちに，津和野藩士やそれにゆかりのある人が多いということは，興味あるところです。
>
> これは，堀田仁助が活躍した頃，津和野に藩校養老館を創立し，人材養成の基礎を確立した第8代藩主亀井矩賢，また，幕末の藩主であった亀井茲監の存在が大きいと考えられます。津和野藩第11代藩主亀井茲監は，その頃のわが国をとりまくロシアとかヨーロッパ諸国の動きに深い関心を持ち，1868年（明治元年）には明治政府に北海道開拓に関する建言書を提出し，その後の北海道開拓の根本を確立したといわれています。
>
> 皆さんもよく知っているように，津和野町は島根県の最も西の端にあり，北海道とは遠く離れている町です。津和野藩がどのようにしてこの時代に，北海道の開発と深くかかわりを持つようになったのでしょう。

堀田仁助という人[7]

おそらく皆さんの中には，「堀田仁助」という名前さえこれまで聞いたことがないという人が多いだろうと思います。この堀田仁助という人は，1747 年（延享 4 年・1745 年生まれとする説もある。）に，当時の津和野藩士であった堀田嘉助の長男として広島で生まれ，小さい時の名は兵之助と呼ばれていました。

父の嘉助が津和野藩の役人を務めており，彼も 13 歳の若さで役所の記録係を命じられました。間もなく津和野へ帰ってからは，勘定所の会計係となったのです。これは，仁助が小さい頃から計算に優れ，数学や天文学に興味を持っていたからでした。このことが津和野藩内だけでなく，やがては幕府の役人にも認められるようになり，1783 年（天明 3 年）には幕府から天文学研究員として召しかかえられることになりました。やがて，天文学を応用して暦を作成した功績により賞を受け，ますます重く用いられるようになったのです。

その頃，幕府にとって最も重要な問題に考えられていたものの一つが，北海道の警備でした。そのため幕府は，江戸と北海道方面との直接航路を開く必要に迫られ，その測量作業を仁助に命じたのです。この命令を受けた仁助は，1799 年（寛政 11 年）3 月 24 日に江戸の品川湾を政徳丸で出航し，海上航路の測量を続けて約 3 か月を費やし，6 月 20 日北海道の厚岸湾に到着したということです。

この間，約 600 km の航路をどのようにして航海し，測量したのでしょう。もちろん，当時のことですから正確なコンパスや地球儀などありません。したがって測量に使った器具は，そのほとんどが仁助の工夫発明によるもので，その苦労は並大抵ではありませんでした。

日本地図の作成で有名な伊能忠敬は，西洋の測量技術を取り入れて全国の沿岸を実測しましたが。仁助はそれより 2 年も早くから測量を手がけています。しかし，そのことはあまり知られていません。

ここで惜しまれるのは，仁助が苦労して考案した測量器械が，1853 年（嘉永 6 年）の津和野町火災でほとんどが焼失してしまったことです。わずかに焼け残った蝦夷地図，日本地図，世界地図と黄銅製の尺度（ものさし）やコンパスなどが，現在は日本学士院に保存されています。また，津和野町郷土館，太鼓谷稲成神社に展示・所蔵されている仁助作成の「地理測量図，天球儀，地球儀」は，県の文化財に指定されています。このように伊能忠敬に劣らぬ大冒険をなしとげ，大きな功績を残した堀田仁助の名声があまりにも低いのは，大変残念なことです。

日本の歴史の上では，ほとんど無名に近い堀田仁助も，わが島根県にとっては偉大な人物でした。わずか 13 歳で藩の役人にとり立てられ，その才能を見いだされて天文学や数学に優れた研究を積み重ね，その知識や技術を生かしてわが国で最初の江戸と北海道間の航路の測定を成しとげたのです。さらに 1799 年（寛政 11 年）仁助 55 歳の時には，当時はまだ未踏の地といわれていた北海道東岸の新航路を開設するなど，陸地測量の伊能忠敬と並び称されるほどの功績を残したのです。

5．島根県と北海道・札幌とのかかわり

筆者は，経営学・マーケティングを研究している。最近，日本の商（商業）の歴史に興味を持ちだしている。それとの関連で，北海道や札幌の開拓の歴史をかじるようになって，いろいろ筆者なりに調べるうち，いくつかの興味深い点に出会っている。その中で意外とも言える人物を知ることになった。

北海道開拓と言えば，開拓使，屯田兵，開拓会社が3本柱である。

ここでは，一人でやってくることなど想定されていない。個人で開拓は無理だという通念みたいなものがある。したがって，個人でやってくるのは，食いパグれたか，悪いことをして逃げて来たか，エタ被民の類で出身地から追い立てられたのではないかというのが後世の人が考える相場であった。

しかし，金さえあれば何人でも人夫を雇って鍬を以て切り開きができたのである。彼らは，今の貨幣価値にして600万から1千万円を携えてきて，単独で札幌の地を開拓したことが分かっている。筆者は，札幌の開拓では，進取の気性に富んだ，一獲千金を夢見た人たち，今でいえば，ベンチャービジネスマンとでもいえそうな人々，たとえば，長野県諏訪出身の上島正など数十人の人たちがいたことを紹介してきている[(8)(9)]。

また，同じく「札幌の歴史を築いた先人達」に載っている「高岡直吉・熊雄」という人物も島根県津和野出身の単独者たちである。

一般に北海道の開拓の歴史として，道外でもあまり馴染のない県や地域からの出身者がいる。上島等のように長野県からの移住者は少なかったが，島根県からはもっとすくなかった。

山陰移住会社仮事務所（倶知安町教育委員会提供）

「聚富物語」によると，「移住者の出身都府県」（明治 15 年～昭和 10 年）として，47 都道府県中，長野県出身 22 位，島根県出身 40 位である[10]。

また，島根県からの北海道への移住者としては，明治 28 年（1895）に山陰移住会社が倶知安に入ったことがしるされている[11]。

また，倶知安町の資料には，倶知安には既に明治 25 年（1892）に徳島県から入植していたとある。

いずれにしろ，移住者の少ない県や地域から単独でやってきた人たちの艱難辛苦や活躍もあって，今日の北海道があることは紛れもない事実なのである。

お わ り に

なぜ，津和野からこんなにも有名人が輩出しているのか

とにかく，現在の津和野も歴史ある小さな町といった感じである。なぜ，四方を山に囲まれた狭い盆地からこんなにも有名人が輩出しているかについてはいろいろ研究がなされている。

西 周は，弁当を作ってもらって，母屋の隣にある蔵に籠って，勉強したとあり，森 鴎外は，親にひたすら勉強をさせられたので故郷を苦々しく思い，自分は津和野でなく石見に墓を作ってくれといったという話もある。子供の出世を願う気持ちが，他の地で名を挙げよという気風がこの地にはあったのかもしれない。

しかし，まさか札幌農学校卒で，兄が「初代の札幌市長」，弟が「第 3 代北大総長」になった高岡兄弟 2 人とも津和野出身であるなどと知っている人は少ないのではないか。

しかも，故郷津和野には，高岡兄弟の功績をたたえ，1998 年に「高岡通り」という通り名まで創設されているほどの人物たちであったとは。

こんなことは当たり前の話で単に筆者の認識不足のせいではないかとも感じたが，津和野の郷土史家の書いた本の中に，「高岡兄弟について，札幌時計台にある図書を見ていて，彼らは単に島根県出身とあり，津和野出身とは書いてなかったので残念であった」という記述を見たので，あながち筆者の無知の所為ばかりではなかったのではないかと考えた次第である。

〈補説〉：マーケティング研究における西 周と森 鴎外について

現在，筆者は，マーケティングを学問（マーケティング学）にするべく研究を行っている。その過程で，津和野出身の西 周と森 鴎外も出てきている[12][13][14]。
その点を以下に若干紹介してみたい。

⑴ 西 周と〝*Philosophy*〟（哲学）のこと

哲学者の木田 元（2015）が，自著[15]で，「〝*philosophy*〟を〈哲学〉と訳したのは，西 周の

誤訳です。本来は，「愛知」と訳すべきでした」とした上で，

> 日本にはフィロソフィアに対応する言葉はありません。ヨーロッパでも事情は同じで，ラテン語でさえ基本的にはギリシア語の音を移しているだけです。ヘーゲルではないけれど，もし生活に本当に必要なものだったら，どの言語にもこれに当たる自前の言葉があっていいはずでしょう。欧米諸国の場合は，日本のように誤訳ではないまでも，ただギリシア語の音を自分流の表記の仕方で移しているだけですから，考えてみればこれはこれで妙な話です。

この西 周に関連する「愛知」は，マーケティングを学問にする際，人間概念に組み入れられるべき重要な要素であると考えている。

また，木田が，「それぞれの国で重要なものはそれぞれの国の言葉があるはずである」という説も出している。

今日，これほど日本において人口に膾炙した「マーケティング」を，筆者は，学問にしたいと考えるとともに，「カタカナ語のマーケティングを日本語で表現したい」という筆者の思いと合致する説なのである。

ここに一冊の本，松尾義之著『日本語の科学が世界を変える』（筑摩選書，2015）がある[16]。

松尾は，『日経サイエンス』の副編集長などを経験した，科学ジャーナリストである。その長年の経験から，彼は，「毎年一人の割合でノーベル賞を輩出している日本の科学・技術，その卓抜した成果の背景には，日本語による科学的思考がある」との考えを持つにいたったという。その言わんとするところのものは，

> 日本人は日本語で科学をしている。実はこの話を持ち出すと，科学者を含め，たいがいの人から「何のことですか？」と言われてしまう。実際，第一線の科学者に「先生は日本語で考えて科学をされているのですよね？」と持ちかけてみるのだが，10 人が 10 人，何のことかとキョトンとされてしまう。みなさんはどう思われるだろうか。日本人だから日本語を話す。だから日本語で科学研究をする。あるいは日本語で技術の研究をして画期的な工業製品を作る。これは，本当に当たり前のことなのだろうか。
>
> では逆に，なぜ日本人は英語で科学をしないのだろうか。フィリピンやインドネシアなど東南アジアの国では，最初から英語で科学教育を進めているところが多い。なぜ日本（と中国）だけが違うのか。
>
> その理由は，日本語の中に，科学を自由自在に理解し創造するための用語・概念・知識・思考法までもが十分に用意されているからである。そして，日本で生まれた成果や概念は，日本の科学者や技術者による大量の英語論文を通じて，日常的に外国に伝達されている。だからこそ，日本の人も外国の人も，日本人科学者が日本語で科学を創造・展開している事実に改めて注意を払わないの

だ。

私は科学ジャーナリストとして，翻訳（日本語と英語）という作業が関与する場面で，特に多くの仕事をしてきた。それもあって，この「日本人は日本語で科学する」という事実が，決して自明ではないことを何度も何度も体感して来た。翻訳を「ヨコをタテ，タテをヨコに変えるだけ」とみくびる人がいるが，それは大間違いだ。

過去1500年以上にわたり，私たち日本人は，最初は中国文化に始まり，蘭学，そして近代西欧文明と，それまでの自分たちが持っていなかった新しい知識や概念や文化を積極的に取り入れてきた。言語が違うのだから，そこには必ず翻訳という行為が存在した。その際，単なる言葉の移し替えでは済まないことも多々あったであろう。そこで新しい言葉を創造して，概念知識や思想哲学まで，きちんと吸収したのだ。だからこそ，例えば今日の科学において，自由に新しい成果を生み出す言語環境が整ったのだ。私自身，新しい概念が新しい漢語日本語として生まれていく場面に幾度も立ち会ったことがある。

だからいま，こう考えている。日本語で科学ができるという当たり前でない現実に深く感謝すること，この歴史的事実に正面から向き合ってきちんと評価し大切に伝統を保持していくこと，それが日本語で科学することの意義であり，責務である。それは日本の科学や技術を発展させる原動力となり，世界中の人々が望んでいることにつながっていくはずだ，と。

である。

（こうして，松尾は，日本語重視の立場から，小学校3年生からの英語教育開始には反対を表明している）

実際，日本で重要と考えられる学問はほとんど日本語で表記されている。松尾が言うように，自然科学の物理学，化学などはもとより，人文社会科学系でも，商学，法学，経済学，経営学，統計学，心理学などがある。

ただ，このことから直ちに，「マーケティング」を日本語表記にする必要があるとは言えないのかもしれない。

しかし，今日，日本において「マーケティング」の重要度が増している今，また，学問に高める必要性のある今こそ日本語で表記する必要性を感じるのである。

その理由の一つは，日本においては，鎌倉・室町時代よりビジネスが活発化しており，すでに，今日われわれが学んでいるアメリカなど外国から移入された経営手法は，当時ほとんど存在していたと考えられるからである。つまり，この時代に，日本独自の経営学やマーケティング（学）に高めるべき素地が醸成されていたことを考えると，やはりというべきか，日本発（流）のマーケティングというものの存在が欠かせないと思うのである。

結論を先取りすると，筆者としては，『マーケティング学』が出来次第，日本語では『企業学』と表記したいと考えている。

こう考える理由の一つに鴎外も大いに関係している。

⑵　森 鴎外と *Statistic* と統計（学）のこと

統計学の学問形成は非常に古く，300 年以上の歴史を持っていると言われている。

〈ウィキペディア〉によると，

> 古来，為政者は，徴税，兵役などのために，その支配する領域内の実情をできるだけ正確に把握する必要がありました。明治初期に「統計」と訳された statistics（英）やその基になった statistik（独）はラテン語の「status」（国家・状態）に由来していますし，19 世紀のフランスの統計学者モーリス・ブロックは「国家の存するところ統計あり」という言葉を残しています。こうしたことからも，統計が国家経営に欠かせないものとして発展してきたことは容易に理解できます。

驚いたことに，「統計」という日本語訳者（名付け親）は，文豪として名高い〝森 鴎外〟であった。この点について，〝スタチスチック〟を「統計」と訳すことになった経緯を明らかにする宮川公男（2015）の論考が参考となる[17]。

今日では，統計および統計学という日本語が定着しているが，当初はそれが「訳字論争」の末に決着したものであったという。しかもその論争の一方の主役（「統計」と訳すること）があの文豪で軍医でもあった森 鴎外であったというから驚きである。

宮川によると，統計学は幕末から明治維新にかけて移入されたが，当時は，スタチスチック（statistic）という英語あるいは〝Statistik〟というというドイツ語をどのような日本語にするかの議論が行われていた。そのころまでに用いられていた候補は，形勢，国勢，知国，国治，統計，政表，表記，綜計，製表などかなりの数に上っていた。

宮川は，「訳字論争 ―― 森林太郎　対　今井武夫」という項で，論争の経緯を説明している（この森 林太郎は陸軍軍医学舎教官であった森 鴎外のことである）。

宮川の結論として，

> 森 林太郎は文豪・文学博士森 鴎外の名で知られるようになっていたが，彼が学んだ医学から統計学，医学統計および公衆衛生学にわたった学識と学術的業績は並大抵のものではなく，きわめて傑出したものであった。その中で，統計訳字論争のきっかけになったのが‘医学統計論題言’であり，そこで，森は，「スタチスチック」を「統計」としてよいという論戦を張ったのであるが，それは〝わが国の統計学の歴史における金字塔〟とも評価される貴重な論考である。

と述べている。森の論旨は，以下のようなものだったという。

> そもそも歴史的に多くの変遷を経てきた学科などの意義を一語で十分に含蓄した字に訳すことを望むのことは無理であり，進歩の止むことのない学問についての訳語は今日の学問の程度に相当する一つの解釈によってできるだけそれに名実の合致するものを望めばよい。そう考えると，

「或る徴候に就いて物を計へ之を統べて数門とす」（異なる特性ごとに物を数え分類したカテゴリーをつくる）というように「物を計り之を統べる」という意味を持つ統計という訳語は，その意味では古くからのスタチスチックの訳語として不可ではなく，決して定義もなく勝手気ままな訳字ではない。統計には釈義が多いからといって，俗人に「尊信渇仰」の念を抱かせるためにことさら深奥な意味を持つものとしてスタチスチックという原語をそのまま使うべしというのは愚劣な考え方である，というのが森の結論であった。（傍線，筆者）

今日，統計学は，隆盛期に入っていると言っても過言ではない。日本の統計学の学会には，「日本統計学会」と「統計研究会」がある。前者には，自然科学系はもとより人文社会系の学者研究者，民間や外国から研究者など合わせて会員数 1,517 名（2016 年 1 月 6 日現在）が加入している。学会誌として「統計学研究誌」を英文と邦文の 2 冊（それぞれ毎年 2 回）出している。「会報」は，年 4 回。一方，「統計研究会」では，会報「*ECO-FORUM*」を年 4 回刊行している。（注：筆者は，両学会とも（一応）会員である）

こういう歴史・実態をみるにつけ，日本の科学についての松尾説が裏付けられていると感ぜざるを得ない。

また，鴎外は，「和魂洋才」という言葉でもいろいろ引用される人物である。

日本では，明治に入って「和魂洋才」（和魂漢才も含めて）論議が，福澤諭吉などを先頭に盛んとなった[18]。

こうした中，平川祐弘（2016）は，著書『和魂洋才の系譜 —— 内と外からの明治日本 ——』で，「鴎外と和魂洋才」の関係を深く研究している[19]。

以上，筆者が，『マーケティング学』（まだ出来ていないが，出来たとすると）を『企業学』としたいという理由の一端である。

注と参考文献

(1) 山岡浩二(2014)『津和野をつづる —— 生粋の津和野人による津和野覚書 ——』，平成 26 年(2014) 8 月 15 日発行，モルフプランニング。

(2) 「札幌の歴史を築いた先人達」（札幌歴史資料館）：
(http://www.justmystage.com/home/moiwa/sapporo-siryoukan/lekishibunko/rekisi/index.htm)

【挙がっている先人たちの名前】

浅羽靖・戸津高知，安達喜幸，我孫子倫彦，阿部宇之八，荒井金助・早山清太郎，伊藤一隆，伊藤亀太郎，今井藤七，岩村通俊，ウイリアム・クラーク，ウイリアム・ホイラー，**上島正**，上田万平・善七，宇都宮仙太郎，エドウィン・ダン，大滝甚太郎，大友亀太郎，小田良治，黒田清隆，佐藤考郷，佐藤昌介，サラ・クララ・スミス，重延卯平，島義勇，志村鉄一・吉田茂八，水原寅蔵，助川貞二郎，鈴木豊三郎，**高岡直吉・熊雄**，対馬嘉三郎，中村信以，新渡戸稲造，橋本正治，古谷

辰四郎，ホーレス・ケプロン，松本十郎，三木勉，宮部金吾，村橋久成・中川清兵衛，山田幸太郎
（以上，46 名）

⑶　高岡直吉：ウィキペディア

⑷　高岡熊雄：Weblio（http://www.weblio.jp）

⑸　広井勇＆八田與一「新渡戸先生の追憶　高岡熊雄」（GAIA）（2013 年 12 月 08 日）：http://plaza.rakuten.co.jp/jifuku/diary/201312080002/

〈新渡戸先生の追憶（抜粋）　高岡熊雄　北海道帝国大学総長〉（全集別巻 p.68-76）

私は新渡戸先生が海外留学を終って明治二十四年に札幌に帰って，六か年間親しく先生の下に教えを受け，その後本年に至るまで先生の薫陶を受けた。

先生は札幌農学校を卒業後開拓史に奉職になり，後に東京大学文学部に入り，英文学と経済学とを研究された。当時の東京大学文学部の学科中には経済学も含まれていた。後，先生は日本とアメリカとの間に一つの橋を架けるのが自分の使命であるとの考えでアメリカに留学された。

北米合衆国ではジョンス・ホプキンス大学で三年間，経済学，統計学及び英文学を研究し，その後札幌農学校の助教となったが，更に農政学を専攻するためにドイツに留学になった。

当時のドイツの経済学界はちょうどいわゆるドイツ学派が興って，イギリス学派と相対立するに至った時代であった。特に農政学においては他国よりも一段進んでこれが研究されていたので，新渡戸先生が農政学の研究のためにドイツに行かれたのは真に当然であったと思う。そして先生が入学したのはボン大学である。ボンの大学はわが国で申せばちょうど学習院のごときで，ホーヘンツオレルン家の皇族たちは多くはこの大学に遊ばれ，ヴィルヘルム二世また皇太子もこの大学に入学された。私も後に新渡戸先生の勧めによってこの大学に遊んだが，ちょうど私が入学したおり，ドイツの皇太子も入学され，殿下と共に同じ教室で講義を聴いたものである。新渡戸先生がつとにこの大学を選ばれたのは，その当時有名な経済学者ナッセ教授がおられたからであったと思う。ナッセ教授は経済学の中で特に農政学によほど興味を持っておられた方で，アングロサクソンの民族における農地共有制の存在についての研究発表で有名である。ボンの大学はライン川の辺り，風光明媚の地にあり，またこの街には偉大な作曲家ベートーベンの生家がある。また大学の近くライン川の辺りにはアーントの銅像があり，Der Rheim, Deutschlands-Strom, nicht Deutschland’s Grenze〔ラインはドイツの川でドイツの国境ではない〕という有名な句が刻んである。

（略）

先生はボンの大学を去り，ボストンに移り，マイツエン，ワグネル，シュモラー教授に師事され，最後にハレの大学に遊ばれた。ハレ大学においてはコンラッド教授に親しく師事された。さきにボン大学のゼーリング先生に勧められ，ベルリン大学で研究され，更にこのコンラッド教授のところにおいて完成された新渡戸先生の論文に「日本の土地所有，分配並びに農業的利用」がある。これが先生のハレ大学学位論文である。その第一章には歴史的土地制度を，第二章には現在の土地制度が論究されている。（略）先生はハレ大学において学位試験を受けられ前述した論文は既に審査合格となり，いよいよ口頭試問を受けらるるとき，大学の規定により宣誓しなければならなかった。然るに先生は熱心なフレンド宗の方であるから，誓いをなすことを拒まれた。指導教官は先生と同時に受験したユダヤ人も誓いをなし，別にたいした意味のものでないから誓いをなすよう再三勧められたが，先生はそのような意味の誓いならなおさらすることはできないとて，ついに宣誓せずして受験して合格されたそうです。おそらく誓いをせずして受験したのは他に例があるまいと話されたことがある。

なお，先生はコンラッド教授の演習において「日本の農民解放」を書かれた。ちょうどコンラッド教授は国家学大辞典第一版を編集中であり，先生の論文を一流諸学者の執筆論文よりなるその辞典に加えられた。かくて先生は一青年学徒でありながら，堂々世界的学者と肩を並べて論文を掲載

する事ができたので，こんな嬉しいことはなかったと先生から後に伺ったことがある。

先生はドイツからの帰りにアメリカ合衆国を通り，さきにジョンス・ホプキンス大学在学中のアダムズ教授について研究された「日米交通史」を訂正して，ジョンス・ホプキンス大学の歴史学及び経済学叢書の一つとして出版された。

かくして明治二十四年，先生は日本に帰られた。札幌農学校に帰られて，学校における授業も農政，植民，農史，農学総論，経済学等種々の学科を担任された上，英独の語学まで教授された。更にその外，先生は予科の主任，教務の主任及び図書館の主任と多くの仕事に関係された。

明治二十四年先生が帰朝の折，私は予科生だったが，先生から初めて英語を教わった。それは独り教室においてのみならず，毎日曜には先生のお宅までもお邪魔したもので，当時の懐かしい思い出は今もはっきり私の脳裏によみがえってくるものがある。また私は予科を卒（お）え本科に入ってから，初めてこれも先生からドイツ語の手ほどきをしていただいた。その頃まだデル・デム・デンもわからない中に，ドイツ語の詩を暗誦させられたものです。その折暗記したものは今もこれを覚えております。

Ich ging im Walde　〔ぼくは森に出かけた〕
So fur mieh him,　〔ひとりきりで〕
Und nichts zu suchen,　〔何を探すでなく〕
Das war mein Sinn.　〔それがぼくの好きなことだったから〕*

云々というゲーテの Gefunden（みつけたもの）等その一つです。先生は始終話しているのが発音に熟達するのに最もよい方法であると言われました。先生は前にボン大学に留学された折，ドイツ語を学習された当時は，毎日二十なり三十の単語を書いた紙片をポケットに持って，街を散歩などする時にもこれを暗誦するように努められたそうである。郵便切手を買うにも必要なだけ一枚ずつ買ってこられた。なぜそんなことをしたかというと，とにかく切手を買うにもしゃべらなければ買えない。そのしゃべるドイツ語を習得するためにかようなことをされたということです。

僕は森に出かけた　ひとりきりで　何を探すでもなく　それが僕の好きなことだったから　森陰で僕は見た　一本の小さい花が咲くのを星のようにきらめき　瞳のようにきれいだった　僕はそれを摘もうとした　その時花は言った　「折られてしまって　死ぬしかないのですか」と　僕は全体を堀った　小さい根の所から　僕は庭へ花を持っていった　きれいな家のそばのそして
花をまた植えた　静かな場所に　今はいつでも枝を伸ばし　ずっと花が咲いている

先生の農学校に奉職の際に札幌農学校の学制に変革があり，明治二十七年特定学科を専攻し得る制度になりました。午前は皆一様の学科を，午後は農学，農政学及び農業経済学，農芸化学，植物病理学等に分かたれ，それぞれこれを専攻し得るようになった。これがわが国において農政学及び農業経済学専攻施設の最初です。そしてその時初めて経済学を研究するのに演習すなわちドイツ語でいうゼミナールが開かれた。経済学研究のための演習制度も日本においては実にこれが一番最初でした。先生は佐藤昌介先生と共にその創設者であったのです。

当時先生は講義にその他の公務に非常に多忙にわたられ，夜分でも遅くまで机に向かって研究されていましたが，ついに病気になられました。そのために明治三十年と思いますが，農学校を辞して静養しなければならない事となった。農学校在職中は繁用にもかかわらず，先生は「農業本論」を著し，これによって先生は学者として一躍日本の学界に認められた。そして病気療養のために米国に出られ，かの地に静養中できたのが「武士道」であり，先生はこれによって世界の新渡戸博士となられた。この「武士道」は世界各国語に翻訳されて広く全世界の人士に愛読された。

⑹　独立行政法人　北方領土問題対策協会「あなたの町と北方領土とのかかわり　島根県」：http://www.hoppou.go.jp/gakushu/watashitachi/shimane/#s11

⑺　堀田仁助について

〈ウィキペディア〉など：

堀田仁助は，延享4年（1747年）津和野藩士・堀田嘉助の子として津和野藩御船屋敷（廿日市蔵屋敷＝現存せず，現広島県廿日市市）にて誕生。幼少より学問に秀で，13歳で御船手役所筆役見習として採用された。15歳で城下町津和野に移り，勘定書見習として勤める。天明3年（1783年）6月，幕府天文方属員となり，暦作御用として渋川家を補佐した。寛政11年（1799年）には幕府天文方として東蝦夷への直通航路を開拓するため測量を命じられ，完成させる。

翌寛政12年（1800年）に伊能忠敬が蝦夷地へ測量を行うが，堀田の航路開拓なしには成し得ないものであったとされる。

文政10年（1827年），81歳にして引退し津和野へ帰藩する。帰藩してから2年後の文政12年（1829年）に長い生涯を閉じた。

仁助が制作した天球儀，地球儀は島根県指定の文化財として太皷谷稲成神社の宝物殿にある。

⑻　黒田重雄（2011）「札幌の偉人・上島　正に関する一考察 ―― なぜ，上諏訪（長野県）の武家の嫡男が札幌を開拓する企業家となったのか ――」『開発論集』（北海学園大学開発研究所），第88号（2011年9月），pp.128-166。

⑼　黒田重雄（2012）「札幌市域の開拓に貢献した企業家に関する覚え書き ―― 札幌市厚別区は8名の企業家たちの開墾によって始まった ――」『開発論集』（北海学園大学開発研究所紀要）第90号（2012年9月），pp.115-140。

⑽　聚富物語：http://www16.ocn.ne.jp/~ymr-0130/rekisi-izyu.html

（都府県）	（戸数）	（都府県）	（戸数）	（都府県）	（戸数）
1　青森県	68,855	17　愛媛県	9,239	33　千葉県	4,670
2　秋田県	64,067	18　兵庫県	9,047	34　山梨県	4,642
3　新潟県	61,636	19　鳥取県	7,665	35　和歌山県	4,559
4　宮城県	51,831	20　茨城県	6,950	36　群馬県	3,891
5　富山県	48,445	21　滋賀県	6,533	37　埼玉県	3,890
6　石川県	47,901	22　長野県	5,956	38　京都府	3,751
7　岩手県	40,318	23　高知県	5,810	39　熊本県	3,481
8　山形県	39,009	24　岡山県	5,563	**40　島根県**	**3,150**
9　福島県	33,122	25　栃木県	5,473	41　佐賀県	2,602
10　福井県	27,392	26　静岡県	5,234	42　鹿児島県	2,505
11　東京都	21,862	27　奈良県	5,049	43　大分県	2,472
12　徳島県	17,970	28　大阪府	5,033	44　長崎県	1,500
13　岐阜県	15,297	29　福岡県	5,017	45　宮崎県	624
14　香川県	14,367	30　山口県	4,951	46　沖縄県	67
15　広島県	10,777	31　神奈川県	4,948	47　その他	5,794
16　愛知県	9,377	32　三重県	4,914	（計）	717,206

⑾　島根県出身と倶知安との関係について：

＊倶知安・史跡マップ：

http://www.town.kutchan.hokkaido.jp/file/contents/821/7412/siseki.pdf

＊ニセコひらふおもしろ歴史ブログ：
http://www.grand-hirafu.jp/blog/50th/history/2010/02

⑿　黒田重雄（2016）「〝マーケティング学〟の訳字を〝企業学〟としたいということについて」『経営論集』（北海学園大学経営学部紀要），第 13 巻第 4 号（2016 年 3 月），pp.83-106。

⒀　西 周

西 周（にし　あまね）は，文政 12 年（1829 年）生まれで，江戸時代後期から明治時代初期の幕臣，官僚，啓蒙思想家，教育者。貴族院議員，男爵，錦鶏間祗候。西 周助ともいう。勲一等瑞宝章（1897 年）。享年 68 歳。

⒁　森 鴎外

森 鴎外（もりおうがい）は，文久 2 年（1862 年），現在の津和野町町田に生まれた。明治 5 年上京，14 年東京大学医学部卒業後，軍医の道を進む。明治 17 年から 21 年までドイツへ留学し，この西欧体験は鴎外の教養と見識を深め，帰国後医学界，文学界の改新のために発言する。作家と軍医という二つの人生を生きていく。そのことは個と組織，伝統と革新，西欧と日本という様々な問題の中に身をおくことになる。明治天皇崩御，乃木殉死を契機に歴史小説の世界を拓き，晩年には史伝文学という新しい分野を開いていく。死に及んで「石見人森　林太郎トシテ死セント欲ス」という遺言を残して，大正 11 年 7 月 9 日に永眠した。享年 60 歳。

⒂　木田 元（2015）『反哲学入門』，新潮文庫，pp.42-43。

⒃　松尾義之（2015）『日本語の科学が世界を変える』，筑摩選書，pp.14-15。

⒄　宮川公男（2015）「日本の統計学の源流を訪ねて〔3〕―― 統計学者　森林太郎（鴎外）と訳字論争」『*ECO-FORUM*』，Vol.31，No.1（November 2015），pp.48-62。

⒅　福澤諭吉（1880）『学問のすすめ』（齊藤　孝訳（2015），現代語訳，ちくま新書，pp.131-135。）

⒆　平川祐弘（2016）『和魂洋才の系譜 ―― 内と外からの明治日本 ――』，河出書房新社。